

に、あたしの部屋へいらしてください。

顔を上げるジュリアンをのこして暗転

ジュリアン

驚いた……このあからさまな求愛はどうだ。王子様を婿にしても恥ずかしくないあのパリ随一の令嬢が、真夜中に自分の部屋へ忍んで来いというのか、この秘書風情のおれに。いつも人の意表を衝いて面食らわせてばかりいるが、これは余りにも……さてよ、これは「畏」かもしれんぞ。部屋へ入った途端にぐるりと取り囲まれて、クロワズノワか誰かに『よお、秘書殿、思い上がりもほどにし給え』などと言われたら……思い上がりと言われても確かに仕方がないのだ、身分が違いすぎる。……畜生！ (赤へ歩いて) だがもし、本気だとしたら……。あの気高い美しい人がおれに恋をして、自らおれの腕に身を投げようというのだったら……。昔、おれが夢にまで描いたパリの最上級の女が……もしそうならこの手紙は、さつき公爵からもらった勲章などより何千倍も価値がある。それなのに行かなかつたら、おれは卑怯者になってしまふ。彼女の眼に臆病者と映るのは耐えられないことだ……美女をむざむざ迷わせたことより、その後悔に一生つきまとわれるのがたまらない。きつと俺はためになつてしまふ。(黒へ行って) ……畏だと仮定しよう、貴族のお坊ちやま方、黙って馬鹿にはされませんよ、笑ったものは一人残らずピストルの弾をお見舞いする、マチルド、あなたもだ。(赤へ) よし、決まった。卑怯者にならないということが全てだ。ナポレオンはどの戦争でも一気に攻略した。ああナポレオン！ 進め、ジュリアン！